



⑥大聖寺所蔵「恐悦申入れのお文」

(本研究は昭和33年度文部省科学研究費交付金「各個研究」による研究の一部である。)

Linguistic circumstances in *Amamonzeki* Nunnery (Ⅱ)

Summary

In Part I, we touched on the ancient court-lady speeches which have persisted in *Daisyôzi Amamonzeki* nunnery.

The present paper is an attempt to explain some linguistic circumstances in this nunnery. It is difficult to classify the extremely varied assertions which have been made connecting linguistic and nonlinguistic behavior. Therefore, in this paper, we will primarily ask three kinds of nonlinguistic questions: 1) What are the natures of human relation connected with *Daisyôzi* and Imperial palace, of social circles and their manners and customs? 2) What are the year's regular functions in *Daisyôzi*? (the Feast of the Seven Herbs of Health, *Kazyô*, the moonlight party and ancient customs etc.) 3) What kinds of education and recreation were done for the nuns? (the distinctive perception of public and private affairs, *Kiyo* and *Otugi*, *Genzi-monogatari* cards and others)

Thus, we intend to treat in next Parts on the correlation between some aspects of language and non-linguistic phenomena in this nunnery.

尼門跡の言語環境について

ほしけれど、小藤、八千代ごときの女郎、今ハあるまじければ、ちからなくこそ侍れ、(「結燕石十種」
所収本による)

〔注7〕 花のおかるた (§ 57)

「花のおかるた」に描かれている草花100種中、大聖寺現門跡が記憶しておられる名称を次にあげる。
アサガオ・アザミ・アジサイ・アズマフジ・アヤクラ・イワフジ・ウノハナ・ウベノハナ・ウメ・オー
ジョッキ・オダマキ・オミナエシ・オモダカ・カイドー・カイルノママコ(コンベイトー)・カノコユ
リ・カブトソー・カブトバナ・カンギク・カンゾー・キキョー・キブネギク・キリシマ・クサフジ・ク
ズノハナ・ケイトー・ケシ・ゲンゲ・コアオイ・コーバイ・コーホネ・サクラ・サギソー・サンシュ
ー・ザクロ・シオン・ジャクヤク・シューカイドー・シュラン・シンメイユリ・ジンチョーケー・(ち
んちょうげ) スイセン・スイレン・スオー・ススキ・ステコブシ・スマレ・セキチク・タケシマユリ・
タンポ・ダンドク・ツクモ・ツバキ・ツユクサ・ツユバナ・テツセン・ナデシコ・ナノハナ・ノギク・
ハギ・ハナショープ・バラ・ヒガンザクラ・ヒノギク・ヒルガオ・ビワ・フクジュソー・フジバカマ・
フヨー・ホーセンカ・ホトトギソー・ボケ・ボタン・マンジュギク・ムラサキモドキ・モクレン・モ
モ・ヤエザクラ・ヤナギ・ヤマブキ・ユキノシタ・ユーニシキ(オシロイハナ)・ラン・リキューバイ・
リンドー・ルコーソー・レンギョー
その他である。

〔追記〕 皇后陛下へ尼門跡から 大正天皇御即位の節 恐悦申入れのお文 (§ 58)

このお文は、大正天皇御即位の節(大正4年)に、大聖寺・宝鏡寺・曇華院・光照院・林丘寺・靈鑑
寺の京都六尼門跡連名で、皇后陛下へ恐悦申入れられたときの御文の下書で、横ちらしのものである。

この書式・文体・用語などは古来の女房奉書の伝統をつぐもので、皇后陛下へ恐悦申入れのこのお文
は、まず両陛下の御機嫌を伺い、次に用向の御即位の恐悦に及び、返し書で、お序の折り、この恐悦申
入れを宛名の典侍に依頼している。また宛名の次にある「人々申給へ候」(下役の人から宛名の典侍^{かたじけなが}
へ申上げて下さいの意)「忝りまいらせ候」「恐悦申入たさ」など特異な用語がみられる。このような
お文が、いまもなお、尼門跡から宮中へ、正月の御昆布献上や暑中・吉凶の御見舞などの時に行われている。

次に、このお文を示す。(写真参照)

御悦のため申入まいらせ候愈 御機嫌よく成らせられめでたく恭りまいらせ候いよ 〱 后宮陛下に
も 御機嫌よく成らせられめでたく恭りまいらせ候左やうに候へは此程は 御即位式も御滞なく済せ
られ御にき 〱 の御事数々めでたく恭りまいらせ候右恐悦申入たさ御序に宜しく御沙た被成被下候
かしく

なを 〱 御機嫌共よく久しく万々年までも御寿命長久の御事にて段 〱 めでたき御事のみと祝入恭
りまいらせ候何も 〱 御序によろしく御沙たの御事御たのみ申入まいらせ候 めでたく かしく

典 侍

祥 子 々

人々申給へ候

大 聖 寺
宝 鏡 寺
曇 華 院
光 照 院
林 丘 寺
靈 鑑 寺

桐壺の巻には、写真⑥のように、桐の花、帯木の巻には、帯木といった風であるが、中にはそれとは違ったものもある。たとえば、若紫巻は、かごと雀、松かぜの巻は、琴と琴地といった具合に、源氏物語の内容を考えて書いたと思われる絵もある。しかしまた、巻の名にだけたよって、内容を軽んじた絵、たとえば、「螢」の巻には、小川に飛ぶ螢を描き、「花散里」は、単なる花散る田園風景を、「真木柱」は、字も巻柱とかいて、衣のまきものを、「賢木」の野々宮は、朱ぬりの鳥居を描いている。

〔注4〕 翁かるた (§ 54)

これは次のような、謡曲内百番によるかるたで、正月などにし、持札の早くなくなった人を勝ちとする。

高さこ・しらひけ・唐せん・百万・殺生石・なには・田むら・もりひさ・かんだむ・自然居士・老まつ・かねひら・湯屋・仏原・のゝ宮・はくらく天・より政・千手・はん女・道成寺・養らう・さねもり・みつ・そとは・うかひ・竹生しま・清まさ・玉かつら・はちの木・舟弁けい・志賀・とも長・采女・かしは崎・羽ころも・ありとうし・ぬえ・をは捨・あふひの上・とをる・玉の井・忠のり・大はら御幸・三井寺・遊行柳・かも・かけきよ・やうきひ・紅葉がり・あこき・くれは・俊寛・かきつはた・とくさ・梅か枝・海人・やしま・まつ風・安達原・ふしと・たつた・くらま天狗・あふひ小町・西行さくら・たえま・かすか龍神・あつ盛・定家・さくら川・せいぐわんし・山姥・舟はし・ゆふかほ・せみ丸・とうかんこし・あしかり・みちもり・江くち・すみ田かわ・狸々・右近・せかい・ひかき・花かたみ・うとふ・うきふね・女郎花・はせを・ふしたいこ・源氏供養・のきはの梅・三輪・寺小町・かよひ小町・ふしは・雲林院・はしき木・安たか・二人静・てんこ

この遊び方を記した「翁かるたの定」に、「第一に翁二に高砂と行高砂をふせたる人田村やしまの内をさしやしまむらの内をふせたる人次に羽衣熊野の内を言つきには道成寺もちたる人利運にゆくつきに三輪立田のうをいふへしもし道成寺もちたる人たつた三輪の内あらはつゝけゆくへし余はつねのことし」とある。

さらに、「諷のものの名をよせ翁かるたと号たるを此としへて袴とともにかえて破爪の御方はつ春の御弄ひにそのふ」と付言してある。

〔注5〕 源氏すごろく (§ 55)

ふり出しは「紫式部」、上りは「光源氏」である。その間に、巻名（「桐壺」「はし姫」など）54と、登場人物名30（「これみつ」「いよの介」「近江の君」など）、計84の小区画と、上りの光源氏に並ぶ女三宮・六条御息所・紫の上・朧月夜内侍を描いた大きな四つの区画がある。さいころは、「ひかるけむし」の六面からなっていて、「ひ」が出れば、桐壺、「か」は、あかしの入道、「る」は、これみつ、「け」は、須磨、「む」は、いよの介、「し」は、はしひめ、といった具合に、順次、小区劃の部分ですすんで、上りの方に進んで行く。光源氏の傍に居並ぶ、紫の上や女三宮たちの所までくれば、上りに近いわけである。（なお、この双六に藤壺の名を入れなかったのは興味深いことである）

〔注6〕 「色道大鏡」に記された歌かるた (§ 56)

源氏かるた・伊勢物語かるた・古今集かるたなどについて言及したものに、畠山箕山著「色道大鏡」（延宝6年、1678年の序がある）巻七^{五二}_五に次の記事ある。

続松、歌かるたの事也、当時傾国のとるハ、貝おほひのごとくに、残らずならべ置きて、歌の上の句を一枚づつ出し、歌に合せてとる時ハ、露松といふ、又常のかるたのごとくに、歌のかるたを、下にかくして、三枚づつまきならべ、擬一枚づつうち出し、歌のあひたる数のおほきかたを勝と定むるを、歌かるたといふ〔筆者中略〕貝おほひのごとくにのみもてあそび来れり、女郎いとまある折ふしや、座中つれづれとしらけたる時は、やさしくもおもはれ侍る、此の歌かるたに、百人一首の歌ならでハ用ひざるやうにおもはれてをかしくこそ侍れ、ねがはくば、古今集の歌や、伊勢源氏やうの歌などをも、かかま

尼門跡の言語環境について

紅 梅

心ありてかせの匂はす園の梅にまつ鶯のとはすやあるへき

竹 川

たけかわ^はのはしうち出し一ふしにふかきこゝろの底はしりきや

橋 姫

橋姫の心をくみてたかせさすさをの平に袖ぞぬれぬる

し る が 本

たちよらんかけと頼みし椎が本空き床に成にける哉

あ け 巻

揚巻に長き契を結びこめおなし所によりもあはなん

早 わ ら ひ

此春は誰にか見せんなき人のかたみにつめる峯のさわらひ

や と り 木

やとり木とおもひてすは木の元のたひねもいかにさひしからまし

東 屋

さし留るむくらや茂き東やのあまりほとふるあまそゝき哉

う き 舟

たち花の小鳥の色は変らしをこのうき舟そ行衛知られぬ

か け る ふ

有とみて手にはとられず見れはまた行衛も知らずきえしかけるふ

手 な ら ひ

身をなけし涙の川のはやき瀬をしからみかけてたれかとゝめし

夢のうきはし

法の師と尋る路をしるべにておもはぬ山にふみまとふ哉

なお、「源氏かるた」の歌のとり出し方は、次のようである。

① 巻の名をよみこんだ歌をとる。これは、大部分は古来註釈書（細流抄・河海抄・花鳥余情等）が、巻の名の由来を示す歌としてあげているものであるが、なかには、巻の名をよみこんだ別の歌をとっている巻もある（みをつくし、鈴虫）。

② 一巻中にある適当な歌をとる。これには、二つのとり方がある。桐壺・紅葉の賀・花の宴・関屋・絵合・野分・梅枝・匂宮・紅梅・手ならひ・夢のうきはしの各巻のように、そのような巻名をよみこんだ歌がない場合と、葵・明石・御幸・柏木の巻のように、それらの巻名をよみこんだ歌があるにかかわらず、別の適当な歌がえらばれている場合とがある。

③ 本文中にはない、別の歌（引歌）をとる。これは、藤のうら葉と若菜の巻下である。

〔注3〕 源氏巻名かるた (§ 53)

読み札には、源氏物語の巻名（桐壺・帚木など）を記し、とり札には、写真版⑤のように、絵を描き、小さく巻の名が書き入れられている。読み手が、この巻の名をよみ上げると、とり手は、この絵のあるとり札をとるのである。

この絵は、大部分は、巻の名にちなんだもの、即ち



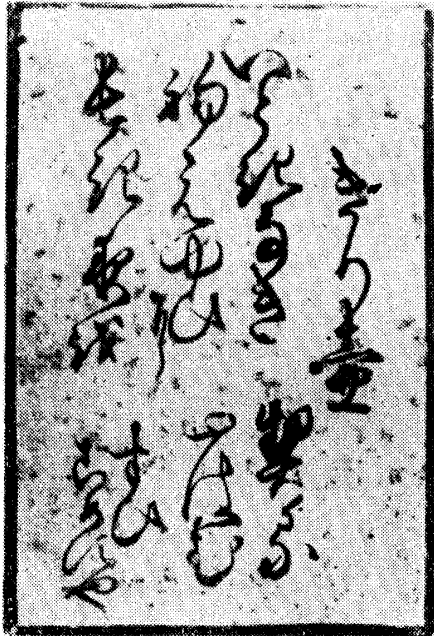
(⑤大聖寺所蔵「源氏巻名かるた」取りふだ)

みしおりの露忘れぬ朝顔の花のさかりは過やしぬらん
乙 女
おとめ子の神さひぬらし天津袖古きよのともよはひ経ぬれは
玉 か つ ら
こひわたる身はそれならて玉かつらいかなるすちを尋ねきぬらん
は つ ね
年月を待に引れてふる人にけふ鶯の初音きかせよ
小 て ふ
花園のこてふをさへやした草に秋まつ虫はうとくみるらん
ほ た る
声はせて身のみこかすほたるこそいふよりまさる思ひ成らめ
と こ 夏
撫子のとこなつかしきいろを見はもとの垣根を人や尋ん
篝 火
かかり火にたちそふ恋の煙こそ世にはたへせぬほのほ成けり
野 分
風さわき村雲まよふゆふへにも忘るゝ間なくわすられぬ君
御 幸
小塩山みゆきつもれるまつはらにけふ斗成(ばかりなる)跡やなからん
蘭
おなし野の露にやぬるゝ藤袴あわれはかけよかこと斗も
巻 柱
いまはとてやとかれぬともなれきつるまきの柱は我を忘れな
梅 枝
花の香は散にしえたにとまらねとうつらん袖にあさくしまめや
藤 の う ら 葉
はる日さす藤の裏葉のうち解て君しおもはゝ我も頼ん
若 菜 上
小松原すへのよわひにひかれてや野辺の若菜もとしをつむへき
若 菜 下
夕やみは道たとへし月まちてかへれわかこ其まにもみん
柏 木
いまは逆(とて)もえん煙の結をれ絶ぬ思ひの猶や残らん
横 笛
よこふへのしらへはことにかはらぬをむなしくなりし音こそつきせぬ
鈴 む し
こゝろもてくさの宿りをいとへとも猶鈴虫のこゑそふりせぬ
夕 き り
山里のあはれをそふる夕きりにたちいてん空もなきこゝちして
み の り
絶ぬへきみのりなからそたのまるゝ世々にと結ぶなかの契を
ま ほ ろ し
大そらをかよふまほろし夢にたにみへこぬたまの行衛尋よ
匂 宮
覚東な誰に問ましいかにして始めもはてもしらぬ我身を

尼門跡の言語環境について

は ゝ き ゝ
かすならぬふせやにおふる名のうき^きに有^すにもあらて消るははきき

う つ 蟬
空蟬の身をかへてけり木のもとに猶ひとからのなつかしき哉



(④大聖寺所蔵「源氏かるた」読みふだ)

榊
神垣は記しの杉もなきものをいかにまかへておれる榊そ
花 ち る 里
橘の香をなつかしみほとゝきす花散里を尋ねてそとふ
須 磨
うきめかるいせをのあまをおもひやれもしをたるてふすまの浦にて
明 石

秋の夜のつきけのこまよ我こふる雲井をかけれ時^もの間をみん
身 を 尽 し
かすならてなにはのこともかひなきにな^にとみをつくし思ひそめけん
よ も き ふ
尋ても我こそ問め路もなく深きよもきの元の心を

関 屋
あふ坂のせきやいかなるせきなれはしけきなけきのなかをわくらん
絵 合
うきめみしそのをりよりもけふはまたすきにしかたへ^にかへるなみたか
松 か せ
みをかへて独りかへれる古里にきゝしににたる松かせそふく

〔諸本、山里とある。ただし、青表紙系統の、横・氏・陽・他・三の各本には、古里とある〕

う す 雲
入口さすみねにたなひくうす雲は物思ふ袖に色やまかへる
朝 か ^はを

夕 か ほ
よりてこそそれかともみめたそかれにほのほのみ^つゆる
花の夕顔

若 紫
手に摘ていつしかもみんむらさきのねに通ひける野辺
の若草

末 摘 花
なつかしき色ともなしになにゝこのすへつむ花を袖に
ふれけん

紅 葉 の 賀
ものおもふにたちもふへくもあらぬ身の袖打ふりし心
しりきや

花 の 糸 ん
いつれそと露の舎りをわかんまにこさゝかはらにかせ
もこそふけ

葵
はかりなき千広のそこのみるふさのおひ行す糸は我の
みそみん

所為アル可カラス因テ内規ヲ定ムルト左ノ如シ

第一 御先代以来ノ修規勤行ヲ恪守スベキ事

第二 室内ニ於テハ僧俗ノ別老若ノ分ヲ問ハズ苟クモ証明者ナクシテ男子ト接セザル事

第三 寺役法用ノ時ト雖モ男子ハ表ノ間ヲ限り奥向ニ延入スルヲ得ザル事

第四 当時ノ什宝ハソノ筋ノ命令書ヲ奉ズルノ外妄リニ開帳又ハ覧観ノ請囑ニ応ゼザル事

第五 如何ナル人ノ請囑アルモ室内ヲ貸与セザル事

右 之 通

二十一年五月

む す び (§ 50)

以上、述べたところは主として大聖寺門跡の言語生活を支える外的諸事実の実態についてであった。筆者が次稿において取扱う予定の言語事実の究明のために、特に現在における外的事実の記述に重点を置きつつ、大聖寺現門跡の話を中心とした口語資料に依存して、現在の実態を明らかにするとともに、一方では大聖寺御日記・同御由緒書・同系図などをも併用し、つとめて前時代を再現するよう試みたわけである。しかし宮中との往復書簡の調査その他個別的には改めて各専門家の研究をまつべき点が多いので、社会・民俗・経済・歴史その他の分野からの御教示を期待するものである。

〔注1〕 後水尾院当時の見月 (§ 51)

〔8月〕15日、名月、御さかつきつねの御所にて参る、まついも、次に茄子を供す、なすひをとらせまし〜て、萩のはしにて穴をあけ、穴のうちを三反はしをとほされて、御手にのき^(もた)る、御さかつき参りてのち、御前のをてつす、せいりやうでんのひさしにかまへたる御座にて、月を御覧あり、彼の茄子の穴より御覧して、御願あり、これらも専世俗に流布の事也、禁中にはいつの比よりはしまれることにか、〔天和元年臘月中旬左僕射基熙「後水尾院当時年中行事上」、国書刊行会刊「丹鶴叢書」故実所収428 べ〕

〔注2〕 源氏かるた (写真版④参照) (§ 52)

源氏物語五十四帖の一卷ごとに一首の歌をとり出し、読み札54枚、とり札54枚、あわせて108枚からなる。小倉百人一首の中味が、源氏物語の歌に代えられたものと考えればよい。とり札は下の句だけを記す。この「源氏かるた」の遊び方は、これまた百人一首のように、源平に分れて争ったり、座敷一面にひろげて、一人一人がお互に勝負を争ったりする。しかし、いずれにせよ、尼門跡で、これをする時には、札をとる時、「いただきます」と、あいさつをしてとる。他人の前にある札や相手方の札をとる時には、「お許しあそばせ」という。そして、相手を余りにひきはなして勝つ事は、礼儀にはずれる事だとされている。接戦の状態で勝つのがよい。これは、お仕えする宮さんに対する心づかいなのであり、また一般的にも、接戦なればこそ何事もおもしろく、そうでない勝負は、むしろ興ざめな事だからであろう。

次に示すのは、大聖寺門跡所蔵の、倫宮さん時代(文政10年ごろ)に書写された「源氏かるた」の読み符である。

(傍注は、源氏物語本文に照して異なる個所を示し、漢字はそのままにした)

き り 壺

いときなき初元ゆひに長き夜^世を契る心はむすひこめつや

たちは「清」の針箱と「次」の針箱をもち、「旦那さん」(自分の仕える高級女官)のものを扱うには、「清」の針でし、自分のものは「次」の針です。こうした宮中の習慣が、宮さん時代に大聖寺などへ持ち込まれたものと思われる。(なお手のひらはいつも上向けにされていて、畳などに付けないようにしつけられる。)

(2) 公私の区別など (§ 48)

大聖寺門跡では、公私の区別が厳重である。

お次の者は、たとえば、客がおみや(みやげ物)を持参しても、「ありがとう」とはいえない。ご殿への頂戴ものという考え方からである。また、客が辞去するとき、「またお出で遊ばせ」というようなこともいってはならない。ご殿に対しての客に、私的なあいさつをするのは、失礼とされている。そのような考え方が、次のような言葉づかいを生む。

開山さんの 550 年の ご遠忌も お滞りのう おするする スミマシヤリまして こんな有がたいことはアラシヤリません。

これは、大聖寺の一老さんがゴゼンに使った言葉であるが、「すみマシヤル」とか「あらシヤル」とかいう敬語は、一老さんの、ゴゼンに対する丁寧表現のように考えられるが、そうではなく、これは、「開山さん」に対する最高の敬語表現だということである。

このように、尼門跡における言葉づかいは、極めて複雑でむずかしい。しかし、その複雑さのほとんどは、身分による使い分けの複雑さである。オカミがたに対する言葉、ゴゼンに対する言葉、お次たちの言葉と、身分によって、使い分けがあり、それらの人々が、同座するような場合には、相手と、自分と、第三者の身分とを考えて、事は、ますます複雑になる。それを、自由に使いこなすには、小さい時から、尼門跡で生活をしなければ無理であるといわれている。

目上の人に対しては「御機嫌よう」(あいさつのことば)とか、「恐れ入りますが」と申すこと、これが一つの特色で、この言葉は、オカミがたに対しても、使うことが出来るのだそうである。そして、現在では、尼門跡ほどには、古い言葉づかいを保存していない公家華族の社会でも、この「ご機嫌よう」だけは、使われている。また、尼門跡では、食事の時「いただきます」とか「ご馳走さま」とは、いわないで、その前後に「ありがとう」という。この「ありがとう」というのは、御所ことばの特徴である。なお食事の作法として、宮さん時代には、上臈以下の者は平付のお膳で食事をし、自分の膝の上に肘をついて、食事するようにしつけられた。現ゴゼンも幼少のとき、食事中、よく「うつむいて」と、注意されたが、現在でもこの作法は続いている。

〔付〕 中宮寺門跡の「定」書 (§ 49)

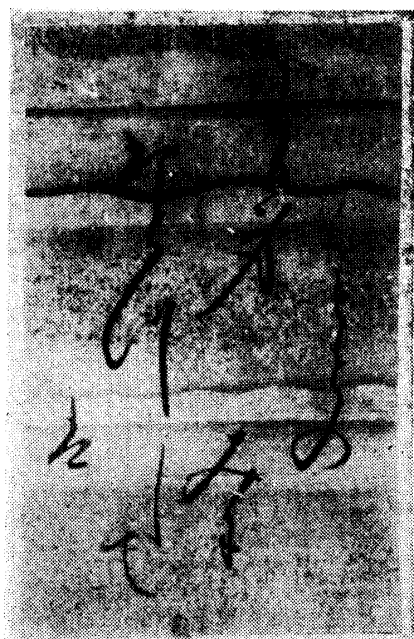
中宮寺には、明治21年5月付(現老ゴゼン入寺のとき)の次のような尼僧の心得書があるので、参考までに付記する。

定

当寺ノ儀ハ 御開祖以来歴々皇族御住職ノ故ヲ以今尚ホ 皇室特殊ノ恩眷ヲ蒙ル所ナリ苟モ当寺ノ尼衆
タラン者ハ 先王相承ノ古義真言兼律宗ヲ護持シ如法堅固仰テ 宝祚ノ延長 列聖ノ冥福ヲ禱リ俯テ各自
ニ進学ヲ修メ安心立命ヲ期スルヲ旨トシ夫ノ世間門ヲ事トシ説教ヲロニ藉リ妄リニ僧俗ヲ親昵スルガ如キ



(③大聖寺所蔵「伊勢物語かるた」読みふだ)



(同「伊勢物語かるた」取りふだ)

を「次」と区別している。

なおこの「清」と「お次」の区別について、曇華院では、次のように考えておられる。

衣類について「お衣」は「大清」に属し、宮さんでも「めしもの」(お衣の下に着る着物)は「中清」,「お足袋」は「お次」の部類に入る。手拭にしても、仏さまを拝む前の清めの手拭は「大清」で、それ以下の使用の時には「中清」,「お次」と区別する。洗濯物の物干竿もその干しものの種類によって上・中・下と区別する。

なおまた、宮中でも「大清」と「お次」の区別が厳重に行われていた。たとえば宮中の針女

明治以後、文明開化の世となり、義務教育が実施されるようになると、貴族の子弟でも、次第に、昔ながらのしつけや、家庭教育はくずれ出す。それでも、現ゴゼンの小さい時のお楽しみは、絵本(貴族の子弟のための、特別のものがあつたらしい)を見ることであった。普通の家の少女たちがみる通俗雑誌は見られることもないし、小説を読むことは許されない。お読みになった古典のうちで、源氏物語が一番面白かったし、帯木や若紫などは特に面白いといっておられる。

大聖寺で、新聞をとり出されたのは他尼門跡よりおくれで、明治30年ごろだそうである。大聖寺で古風を忠実に守ろうとされるのは、先代の樋口さんの人柄と、尼門跡筆頭としての自覚がそうさせるのであろう。それでも、近ごろはラジオを聴き、ゴゼンは岳松流の華道の総裁でもあって、毎週大聖寺はけいこの会場になり、古風さは次第にくずれて行くようである。

2. 尼門跡のしつけ (§ 46)

(1) 「清」と「次」 (§47)

大聖寺門跡では、「大清」・「中清」・「お次」の区別が厳格に行われ、その使い分けが入寺とともに厳しくしつけられる。

宮さん時代の大聖寺では、宮さん用を「大清」、上臈用を「中清」、一老以下用を「お次」と区別する。たとえば、「流し」・「茶碗」・「布巾」・「針箱」・「風呂」・「たらい」などにもその区別がある。(たとえば現在御所蔵の御紋章づきのお文庫には「大清」と記してある。)

現在では、仏さん用を「大清」、ゴゼン用を「中清」、一老以下用を「お次」という。身体も上半身を「清」、下半身を「次」と区別している。

尼門跡の言語環境について

から、20才ごろから、国文学の講義のかたわら、作歌の添削をうけ、また向陽会のメンバーでもあった。

漢学 7・8才から「大学」「中庸」。12・13才から「論語」「孟子」など。

禅学 9才から「臨濟録」「四部録」「仏祖三教」その他。

音曲 8才から、寺内でしばしば行われる謡曲を傍聴して、これに親しまれた。正式には、30才になってから習い、それ以後、謡曲は、お楽しみの課日の一つ。能や狂言の熱心な鑑賞者でもある。

② 倫宮さんご使用の手習のお手本は、まず、いろは歌から始まり、その後、古今集や六歌仙などの歌を習われた。古今集といえ、枕草子や、大鏡に、村上帝の女御・芳子が、古今集を誦んじていたと記されているように、昔から女子の教養として、必ずあげられるべきもので、尼門跡でも、手習いとともに、幼い時から、古今集の歌を誦んぜられたのであろう。

倫宮さんにまつわる逸話として、九つの宮さんは、観音普門品をよく誦んじておられた。そして二つ年下の7才になる小上藤の樋口慈綱さんに、それを教えようとなさるが、なかなか覚えぬ。すると宮さんは、「おやよ（慈綱さんの幼名弥生のこと）は、なんぼいっても覚えぬな。」とおっしゃったそうである。これによって、倫宮さんの利発さの一端が伺われ、また、尼門跡の教育が、幼ない時から、かなり程度の高いものであったことが伺われる。

(2) 大聖寺門跡に残る「源氏物語かるた」などかるた類のいろいろ (§ 45)

大聖寺には、「源氏かるた」〔注2, §52〕、「源氏巻名かるた」〔注3, §53〕、「伊勢かるた」（伊勢物語の所掲歌208首からなるもの、写真③）、「自讃歌かるた」（新古今を中心とする歌人の自讃歌を集めたもの）とか、「翁かるた」〔注4, §54〕、「源氏すごろく」〔注5, §55〕「具合せ」といった文学的な遊び道具が残っている。大聖寺所蔵のこれらは少くとも光格天皇の皇女・倫宮さん（文政10年ごろ）時代以前のものである。

なお京都花街の方式・習慣を記した「色道大鏡」〔注6, §56〕によると、延宝6年には、京都の花街に、古今集かるた・伊勢物語かるた・源氏かるたはなかったようである。

このほか、幼時に物の名を覚えるためにする数種のかるたもあった。

たとえば草花の名を知るためには「花のおかるた」〔注7, §57〕があり、これは百種の花の名を合せて勝負を決めるものである。

また「鳥のおかるた」も百種の鳥をそれぞれ雄・雌に分けた札を合せるものである。この他に「名所がるた」「仏具がるた」などがあって、名所や仏具の名を覚えさせる。

なお、謡の題名や書体を覚えるための「謡かるた」も若干行われた。これは謡内外二百番の名を楷書と草書で書いたもので、草書の札をとるのである。

かつての宮門跡時代の、娯楽といえ、月々の年中行事のうちでも、お楽しみの要素の強い、お雛の節句とか、月見の宴など、また、「おかるた」とか、「すごろく」をなさること、お能や狂言をご覧になること、その他お摘草などであろう。何しろ、身分が高く、ちょっとした出入りにも、儀式がつきまとう。そして、そうお気軽に、どこかへ遊びに行くことは出来ない。特に、女の方であり、尼門跡なのであるから、お忍びというようなことも、事実なかったであろう。歌舞伎などの芝居見物は、禁じられていたのである。源氏物語などの古典は、教養としても、必須であったが、仮名草子の類は、ご覧になれなかった。

いる、お被布は内緒のもので、正式の時には着ない。

〔付〕 大聖寺門跡の古習俗 (§ 41)

前述の年中行事のほかに、京都の古い習俗も大聖寺には残っている。現在節分の晩には、「オンゴロモチ（むぐるもち）送れ」といって「ムグラ」を送るし、昔は当夜、「松げ虫送った」とか、「北条虫送った」などといって虫送りをする行事もあった。

また、京都の旧家に残っている古習俗のように、大聖寺でも、元旦には、帯を使用せず、一々埃をつまみとる。そして二日に「おはき初め」が行われる。このことは「お湯殿の上の日記」にも、「御はうき進上す 御はきぞめあり」とある。正月三カ日の「大福茶」には、小梅やこんぶを入れて厄除にする。初午には、お茶を断つ習慣があり、天神さんの日には、梅干を断つ。正月の初辰の日には「さかしおだち」といって、酒の入ったものを断つことになっている。

また、着物を着たままで、物指を当る時には、「脱いだ」といってから、サイテ（計って）もらう。12月には針供養もする。

III 尼門跡の教育 (§ 42)

1. 尼門跡の教養 (§ 43)

前にも述べたように、明治維新以前には、皇女は、たとえば、徳川家に御降嫁になった和宮さんのような例外もあるが、多くは尼門跡になられた。そして、これらの皇女たちは、御誕生と同時に、入室される門跡寺は大体定められていたようである。

大聖寺に御入室になった倫宮さんに例をとると、文政3年5月朔日御降誕、同年12月11日当寺相続の勅約があり、同9年4月に入寺、その後同13年5月、11才で薨去になった。

宮中での、御生活の時にも、すでに内親王として、また、将来の尼門跡として、さまざまのしつけや教育をうけてこられたであろうが、大聖寺へ入室とともに、年老いて口やかましい、お次やお乳の人からのしつけの毎日があり、家庭教師から国文学・漢学・禅学・習字といった課業を修められた。現在、大聖寺には、この当時の宮さんの生活のよすがを知るものとして、お手習いのお手本やお清書に点や評を加えたものや、こどもらしい言葉のつづりの中にも、高貴さと、教養のほどを示した手紙・口上書や覚え書が、若干残っている。

(1) 大聖寺門跡の受けられた教養 (§ 44)

① 現門跡・石野慈栄さんが、幼少の時から、どんな方法で、どのような書物を学んでこられたか。現ゴゼンの受けられた教育を次に示す。

国文学 6才から、「源氏巻名かるた」、7・8才から「百人一首」、8・9才から「翁かるた」、12才から「源氏かるた」・「伊勢物語かるた」・「自讃歌かるた」。本格的に、「源氏物語」「伊勢物語」「古今集」などの古典にとり組まれたのは、30才以後で、山本行範先生（典薬の息）から個人教授を受けられた。

習字 6・7才から「いろは歌」を習い、順次「古今集」や、「源氏物語」の中にある和歌を習う。

作歌 京都に住む公家華族の子弟のために、明治サン（明治天皇）の特別の思召でできた宮中の御歌所に直属する京都の歌会・向陽会（景樹派）のメンバーである。ここには、東京の御歌所から、伴・千葉といった先生方が、こられて指導なさったこともあるし、普段にも歌会が開かれる。ゴゼンは、山本行範先生

嘉定の行事が行われたのだということで、この日には七色の蒸菓子を釣台にのせて、御所に献上する。その七色の蒸菓子は、武蔵野・豊岡の里・浅茅飴・松風・桔梗餅・^{いが}毬餅・^{まぜ}源氏籬の七種である。

なお、河緒氏の「女官」に、この日、宮中でも、「嘉定を正午に常御殿で供した。その色目は、水泉（葛切）と七嘉定（蒸菓子七色）である。いづれも、虎屋・黒川から調進するものである。この日は、親王、清華、堂上、並に地下の諸家へ玄米一升六合を御祝として下された。此米を虎屋へ送つて蒸菓子をこしらへた」(81頁)とある。

また嘉定のことは、室町時代、主上に「かづう」を差上げるのが例であったと、「御湯殿の上の日記」にも記されている。

③ 旧暦6月16日の「お月見」(お袖止め) (§ 40-1)

これはこの日に16才になった人がある場合にだけ、旧暦6月16日に行う。お月見のおまん(この中に16の小まんじゅうが入っている)の真中に、紅をぬり、そこを萩の箸で穴をあけて月をみるのである。その時、次のような唱えごとを小声で三べんいって祈願する。

月々に 月みる月は 多けれど 月みる月は この月の月

(なおこの歌について、中宮寺では旧6月16日に限らず、お月さんに祈願するときに唱る。京都の旧家では旧8月15日に唱えたこともある由)

月をみている時、鉢みで袖下を切る(実際は切るまねだけをするのが多い)。これを「お袖止め」という。これは、成人の式で、その後は、短い袖のもの(つめ袖)を着るのである。(この袖下は、女官の場合は家来がいただく。)宮仕えに出る者は、この儀式をなくてすませるため、16才以下の場合でも、16才と偽って仕官したものもあったそうである。(なお袖止めは男子も行う由。)

④ 旧暦8月15日の「お月見」 (§ 40-2)

旧暦8月15日に「お月見」が尼門跡でも行われる。大聖寺では、お供え(御神酒・^{おみき}イシイシ[団子]・こ芋、すすき・はぎ)がすむと、かたびらなどを着て、おしん殿のご縁(縁側)に出て、なすびに箸で穴をあけて月をみる。その時に、次のような唱えごとを小声で三べんいって祈願する。

あいわいぎょ ふく徳さいは^らひ もち月の 思^いひのま^まの なすびなりけり

(中宮寺でも行い、「あいわいぎょ」を「あいわいよ」といっている。)

月見に使った各自のなすびを浅づけにし、各自のものを翌朝丸ごと食べるのだそうである。

なお、なすびの穴から明月を眺める習慣は、後水院当時、宮中や一般にも行われていたことが「後水尾院当時年中行事」 (§ 51) に記されている。

この外、節分や3月3日の雛の節句とか、旧暦9月13日の後の月見(豆名月・栗名月)、9月9日の重陽の節句、12月13日のすす払い等、昔は、いろいろ行われたが、それも明治初年までであり、その後次第に行われなくなり、行われても略式になった。また、5月26日は、最後の宮・倫宮さんの、お祥月であるが、このような、各宮さんのお祥月には、いい伝えによる好物(「お好きさんでアラシヤッタ」物)をお供えする。倫宮さんの「お好きさん」は、白豆に結び乾^{じゆんさい}びょうを入れて煮たものや蓴菜に砂糖をかけたものなどだそうである。

三仏忌とか、お祥月の供養、あるいはご遠忌^{おんき}には、紫衣の正装で勤められるが、たとえば、月見の宴には、特に客もないことであるので、帷子程度を召される。また普段お召しになって

宮さんをおまつりしてある。本堂の裏側には神棚もある。(お伊勢さんや天神さんなど
諸神をおまつりしてある)

Ⅱ 大聖寺門跡の年中行事 (§ 37)

尼門跡の機構の概略から、われわれは、そこに生活する人々が古い伝統と習慣の維持につとめてきた諸事情を推察することができる。以下に述べる若干の年中行事・古習俗もまた、古くから伝承されてきた特殊な風習で、これらのあるものは、皇室の行事と密接なつながりを持ち、あるいは公家社会で行われた諸行事をも含んでいるとみられる。

大聖寺の大きな年中行事には、禅寺らしく、三仏忌として、2月15日の涅槃忌(「旧暦」と特記する以外は新暦で示す。以下同じ)、4月8日の誕生忌(じようどう)、12月8日の成道忌があり、その他、10月5日の達磨忌、11月28日の開山忌や歴代の宮さんのお祥月などがある。

その他の年中行事は、宮中の年中行事によっているものが多いようである。その中でも、特に、ゴゼンの記憶に残っている若干を次に述べることにする。

① 七草の祝い(1月7日) (§ 38)

1月7日には、大聖寺でも七種の若菜粥の祝いがある。当日、コマツ(組板)の上にホナガナ(祝菜)とナズナの七草を一对ずつ並べ、オナ(菜)の上を火箸とコガラシ(れんげ)で叩いて、
唐土(とんど)の鳥が 日本(にっぽん)の土地へ 渡らぬさきに なな草なずな

と、7度はやして、厄除のまじないをする。はやし終ると、一对を七草粥に入れて仏さんに供え、オスベリ(お下り)をゴゼン以下がいただく。

あとの一对の七草は七草湯に入れて、歳明け後、この日、はじめてこの湯に入ることになる。この湯に入ると、一年中いつでも爪をソロエル(切る)ことが出来、悪事災難をのがれるということである。

この時のはやし言葉が、明治維新以後は、次のようにかえて行われている。

尊とき神よ、尊とき民よ。尊とき神の 教えのかいは さいわいうけて、わざわいさけよと、
尊とき神よ、尊とき民よ。神・民、とみよ。

西洋の鳥の渡る世となって後は、「もう、唐土の鳥がなど、いえしませんやろ」とは、現ゴゼンの言葉である。

なおこの日、御所でも、七種の若菜粥のお祝があった。かわばた河鰭実英氏著の「女官」によると、「その御粥は、水無瀬家或は松尾一社から七種の若菜を籠に入れ、根引松を立て、奉つるものを、調理したもの」である。そして、「昔、京都の公家々庭では侍が組板の上に七草を載せて、火箸(すりこぎ)、櫓槌、庖丁、杓子、薪割等厨房の具をならべて火箸庖丁等で組板を叩いて唐土(とんど)の鳥が日本(にっぽん)の土地へ渡らぬさきにナナ草なずなと、七度はやして厄除の咒禁(やくよけ)をしたのもこの七日の御祝の為めであつたが、宮中でその式があつたかどうかは不明であるが、恐らくその形式は御台所であつたであらう」(77ペ)と記されている。

② 嘉 定(6月16日、カジョウ。カズウ・カツウ・カゾウともいい、嘉祥とも書く) (§ 39)

大聖寺のゴゼンの話によると、仁明天皇の嘉祥元年(848)に、厄病がはやり、厄除けのために、

- 一 仙洞様より夕かた御便御はり物の御くわし参り候
- 一 御用かかりより役所へ書面参り来る廿二日女御^{めいご}准后宣下仰出され候由申越其由奥へ申入候

なお大聖寺の古くからの御用商人には、法衣は「橘屋」、小間物は「笹菱屋」、米やオカチン（餅）は「丸市」^{まるいち}、菓子は「虎屋黒川」・「沢屋」^{さわ}、ちまきは「道喜」、大工は「三上将介」、瀬戸物は「小筆」^{こひで}、文庫は「信次」^{のぶじ}、扇子は「松月堂」などがあった。これらは京都御所の御用商人と同じものが多い由である。

3. 大聖寺の御殿の構造 (§ 36)

以上にみられる人間関係が特異なものであるだけに、それらの人たちの生活する住居にも当然若干の特異性がみられる。

大聖寺における現在の建物の配置・間取りは、「御本堂」と奥向の「おしん殿」^{てん}・お間（客間）^ま・へヤ（居間）^{だいす}・お台子（茶の間）と表のつめ所、その他、大玄関・内玄関・お台所（内うらの玄関）^{きよどころ}・お清所（炊事場）、お茶室などからなっている。

大聖寺は、もと禁門内にあったのを、元禄9年7月に京都御所隣接の現住所に移された。がその後天明の大火で建物全部が類焼したので、現存の「おしん殿」は、文政8年に皇女のために、父帝・光格天皇の勅旨によって新築下賜されたもので、宮さんのお居間（6畳、御寝の間でもある）^{みつけんのま}謁見間（8畳）とぼたんの間、鹿の間とからなっている。（なお表向の謁見は表御殿の「お客殿」でなされた。）

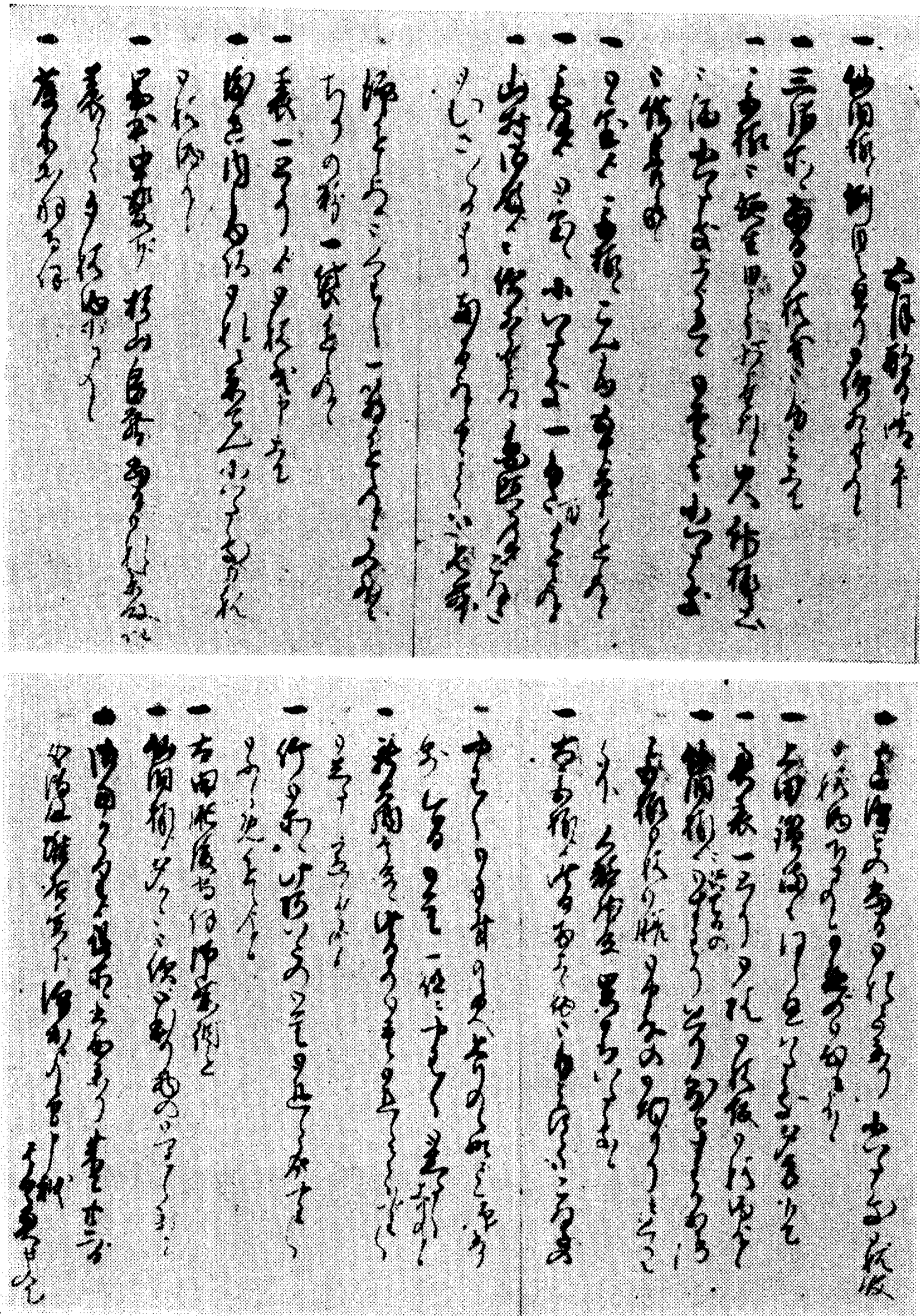
奥向には、「おしん殿」の次に、「お十畳」^{じゅうじょう}・「お二の間」・「お三の間」と並んである。この三室が、奥向の客間で、「お間」^まと呼ぶ。大聖寺では、居間と客間とを区別し、尼僧たちの居間は、一老のへヤ、二老のへヤなど、「へヤ」といって、客間である「お間」と区別する。

宮さん時代には、オカミ方（宮さん以上）はおしん殿へお通しし、お十畳は、公卿階級を通した。お二の間へは、それよりやや下の身分の者、そして、お三の間へは、士族階級を通した。それ以下の身分の者は、「オツギ」に通した（口のお次と中のお次がある）。このように、客の身分によって通す客間を区別した。

なお、宮さん時代には、大上臈・小上臈の居間やつめ所もあった。以上は奥向のことである。大正13年に烏丸通が擴張され、寺の一部が道路にかかる以前は、上記のほかに、お客殿一棟、お使者の間など、表の役所もあったが、今ではわずかに「表のつめ所」が残っているだけである。

奥と表との境をなす場所に、「お錠口」^{じょうぐち}があり、たとえば、御用商人の笹菱屋が小間物などをお見せする時、まず表の許しを得て、このお錠口まで持参し、それ以上は入ることを許されない。お錠口から奥は奥向の世界であり、女の世界であった（なお中宮寺の「定」 (§ 49) に「男子へ表ノ間」^{ささひしや}とある）。
（「ヲ限り奥向ニ延入スルヲ得ザル事」とある）

さらに、現在の御本堂は、青山御所の御殿を移築し、昭和18年10月落成した立派な建物で（御所大工・三上將介氏謹負）、中央に御本尊のお釈迦様、向って右に歴代の住職の宮さん方、左に天皇さん・后



(②大聖寺「御日記」文政13年5月1日)

- 一 奥表一とう御祝御祝飯御祝酒被下候
- 一 仙洞様より御誕生日の御すわり廻り即御すわりあそばし候宮様御祝御膳御まなの御地そうも廻り候御下心静院殿黒もちいたたき候
- 一 大宮様より昨日両上らふへ御ふみにてこなたのやわ〜御手附まいらせられ候ゆへ上げまいらせられ候様にと仰参り即今日お重一組やわ〜おしたし上げまいらせられ候
- 一 新大納言殿へ昨日の御重御返しとて御やわ〜御したし御送らせられ候
- 一 竹御所へ此あいたの御重御返し成やわ〜御にしめ進しられ候
- 一 太田肥後守伺御葉調進

尼門跡の言語環境について

維新以後、内親王の入室のことがなくなるとともに、倫宮さんの薨去後、明治6年3月、小上臈であった樋口慈綱さんが、尼門跡になられた。大上臈であった葉室慈豊さんは、既に亡くなっておられたので（^{死ンデゴザ}ッタので）、小上臈の樋口さんが、尼門跡の地位につかれた。これが華族の子女で大聖寺住職を拝命した最初である。（寺の法事などの時に、大聖寺住職になられた樋口さんは前住職倫宮さんの次にまつられる。）

なお維新以前には、大聖寺は、西賀茂に御料地を持ち、その収益で、寺の経済は、まかなわれていた。維新以後、明治4年には禄高150.8石が支給されたが、今次大戦後は、年6,000円という、御供養料の外は、年爵は廃止された。

(2) 大聖寺「御日記」からみた大聖寺の人の往来と贈答など (§ 35)

奥向の御日記は、日々の、人の出入り・贈答などを記すことが主な目的であったらしい。特に目立つのは、贈物のやりとりの事である。御所や宮さん方の贈物のことや、公卿方、その他の人々からの四季折々における到来物の数々が、微細に記入されて、昔日の大聖寺宮の繁栄の様がうかがわれる。

次に示す御日記の一例は、万治3年7月22日、しやうれん寺様お得度のときの贈答（すぎ原二十帖・まき物一まき、鳥目百疋など）に関する記述である。

しやうれん寺²御とくとの御しうきにすぎ原二十帖まき物一まきまいらせらるゝ 御つかいはうき殿 御ちの人へ鳥目百疋御さしへ五十疋下され候

さらに、大聖寺最後の宮さんである光格天皇の皇女倫宮さんのお誕生日に当る文政13年5月朔日の次の大聖寺「御日記」（写真②参照）にも、御贈答の一端（「こんぶ五十本」「小いたゞき、一ふた百」「御くわし一箱」「ちりの粉一袋」「御花」「お重一組にやわ〜」「おしたし」「御にしめ」など）がうかがわれる。

- 一 仙洞様へ例日之通り御便あらせられ候
- 一 三御所へ当日御祝義御ふみ上ル
- 一 宮様御誕生日にてあらせられ候ゆへ神様かたへ御酒小いたたき上られ候御堂へも小いたゞき御供養=成候
- 一 御室より宮様へこんぶ五十本進しられ候
- 一 宮²より御室へ小いたたき一ふた百進じられ候
- 一 山村御殿より御便あらせられ候円照寺²よりこなた御むさ〜の御事きかせられ候由にて御見舞仰進しられ候御くわし一箱進しられ候又外=ちりの粉一袋進しられ候
- 一 表一とうより御祝儀申上ル
- 一 渡辺内ふ頭御礼=御参てん小いたたき御祝御祝酒下被候
- 一 岡本甲斐介杉山良蔵当日御礼=参殿伺表にて御祝酒下され候
- 一 藤木出羽守伺
- 一 真浄との当日御礼=御参り小いたたき御祝飯御祝酒下され候御庭の御はなも被下候
- 一 上田讃岐も同じ通いたゞき夕方下ル

大聖寺 26 世の現門跡、石野慈栄さんは、石野（基通）子爵の子女であり、明治 25 年、6 才の時、大聖寺に入室し、7 才で得度、16 才で住職になられた。その当時、大聖寺の「奥向」には、ゴゼンの樋口慈綱さんを中心に、ご附弟さんの石野慈栄さん、お次階級には、一老の春嶺さん、二老の東雲さん（シノノメさん）（とあだなした）、その他、「若い人」の瑩堂・真静・祖覚と中通りの祖琉などという人々がおられ、その外に女中一人がいた。なお、その当時の「表向」には非常勤の御家司とベイ（下部）3 人がいた。

現在の大聖寺には、ゴゼンの石野慈栄さん（京都市出身、明治 20 年生）を中心として、一老さん（近江坂本出身、明治 23 年生）・二老さん（京都市出身、明治 35 年生）・若い人（京都市出身、大正 2 年生）その他見習一人、計 5 人からなっている。（§ 5—1 参照）

現門跡は、先代の樋口さんのことを、「オッショさん」とおっしゃる。「オッショさんがな、なかなかその、昔風のきびしいオッショさんでしたサカイニ……」とは、幼い慈栄さんを、一人前の尼門跡へと、教えるべくとされた先師に対する現ゴゼンの想出の言葉なのである。先代と現門跡、現門跡と次代の門跡の関係は、オッショさんにご附弟さん、即ち、師と弟子の関係で、継承されている。（現門跡のご附弟さんは、現宝鏡寺門跡、花山院慈薫さんである。）この点は、仏家の師と弟子の关系到近いものであって、血脈によって継承される日本古来の家の継承とは異なる。

現門跡の、いわゆるオッショさん・樋口慈綱さんは、大聖寺最後の内親王住職・倫宮さん（光格天皇の皇女、文政 3 年 5 月生、文政 9 年 4 月入寺、24 世の宮さんになられた普明浄院玉鑑永潤宮）に、小上臈としてお仕えになった方である。明治維新以前と、それ以後との時代は、維新を軸として、宮住職から公卿出身の住職へと、お直宮寺にも制度上の変化の生じた時である。

現門跡石野さんが、師匠から聞き伝えられた、その当時（倫宮さん時代）の模様を記すと次のようである。光格天皇の皇女倫宮さんを中心に、奥向は、上臈階級二人（大上臈の葉室慈豊さん、小上臈の樋口慈綱さん）、お次階級 6 人（一老以下の尼僧たち）、宮さん付きのお乳の人 3 人、上臈付きの女中各々一人、他に女中一人、下男一人、計 13 人からなっていた。なお尼僧の中に「中通」というのがある。これは尼門跡でなく、他の尼寺で得度し、事情があって尼門跡へ入寺し、お清所で下女の監督に当るもので、この中通は「台子」（茶の間）以上へは行けなかったということである。

表向には、お世話卿一人（宮中との公の交渉に当る公卿、非常勤）、御用掛一人（総取締役・非常勤、「とりつぎ」という家柄から出る、地下の官人）があり、その他、御家司一人（常勤、御所からのお付け人）・御近習・青侍などの御寺御所（大聖寺の宮）御内（家来）が数人あった。（ここでいう御寺御所御内とは、御家司・御近習・青侍など大聖寺の家来をいい、なお御所からつけられるお世話卿・御用掛を御所の御内といっている。）このうち、表で実質的に採配を振っていたのは、御家司である。なお宮さん付きのお乳の人には、御用掛または御家司の妻になるのが普通であって、特に御家司は夫婦そろって、幼くして住職となられた宮さんのお世話をし、表の出入り一切を掌握して、大聖寺宮管理の任に当たったようである。

宮中に、お昆布の献上があり、暑中・吉凶の御見舞も申入れられる。また現門跡、東上の際には、拝謁が許され、親しい女官たちのおへやには、自由に行って、話しこんで来られる。陛下が「京都にナラシヤレ」ば、奉迎にいらっしゃるそうである。このように皇室への距離は近い。

次に大聖寺のゴゼン(御前)石野慈栄さんと、宝鏡寺のゴゼン^{いんの}花山院慈薫さんのお話から得た、貞明后宮さんとの御対面の折の、御感想のいくつかを紹介する。

- ① 自分の目上の人のことを申す時でも、オカミ(お上)にお話し申し上げる時には、敬語をつけてはならない。

宝鏡寺の若ゴゼンにとって、大聖寺のゴゼンは、目上の人(前者は後者のご附弟さんであった)であるが、大聖寺のゴゼンを「慈栄」と名前も呼すてにし、決して敬語をつけてはならない。それは、老ゴゼンは、若ゴゼンにとっては、目上の人であるが、后宮さんと老ゴゼンの身分関係を考えて、申すわけである。

このことは、宝鏡寺の若ゴゼンに限らない。例えば大聖寺の^{いちろう}一老さんの要邦さんは、「わたくしどもに、そないに、なにも直接に陛下からお尋ねございませんけど、もし、そういうことがあった時には、『わたしのことでもな、慈栄とこう申上げるんやで』と、ゴゼンがこうおっしゃいますと、もうびっくりしたようなことでございます。」と筆者に語ってくれた。

- ② ゴゼンが宮中に伺われて、女官たちに会うときには、まず、両陛下のご機嫌伺いから始まる。「お揃いあそばされましてご機嫌よう」という。しかし、この時、一老たちからならば、「ご機嫌よう」でなく、「ご機嫌さんよう」といわなければならない。それは、陛下とゴゼンの身分の違いより、陛下と一老の身分の差の方が大きいので、さらに、へり下って、「さん」をつけるのであろう。(書面で、御機嫌伺い申上げる時でも、ゴゼンなら、「御機嫌よく成らせられて」、一老なら「御機嫌様よく成らせられて」と「様」がつく。)陛下へのお伺いの言葉を申し上げて後、始めて相手の女官に向って、「あなたにもご機嫌よう」というのである。その後、一老なら、更に「今日は(ゴゼンが)お参りあそばしまして、いろいろお世話さんにおなりあそばしまして、わたくしどももお供させていただきましたましてありがとう。」と、長いごあいさつをする。

- ③ 現在では、京都には、オカミがたや公家の方も少なくなり、自然、御所ことばを使う機会も少なくなった。しかし、「やっぱし、わたくしども、とき折り、京都へ両陛下がナラシヤったり、東京へまいりまして、拝謁でもアラシヤル時は、まったく何も知らずにもいられませんしな。后宮さんから、何かお話の出ました時にな、やっぱり御所言葉を使わんなりません。」と。

以上のような言語使用の困難も、尼門跡に入って、御所ことばの生活を永くしているうちに、次第に克服されることになる。

2. 大聖寺門跡の人的関係 (§ 33)

(1) 大聖寺門跡の人的構成 (§ 34)

次のような太政官布告をもって比丘尼御所号は廃止された。

今般御改正ニ付諸門跡比丘尼御所号等都テ被廢寺院ノ儀ハ其儘被存地方官管轄 仰付候間此段相達候事
(宮内省留守官)

その後、明治18年に旧比丘尼御所を「門跡」と称することが許され、さらに昭和16年12月16日付で、次のように「尼門跡」と改称することが御聴許になった旨、宮内省京都地方事務所長から同20日付で、大聖寺はじめ15尼門跡に通知があった。

曩ニ請願ノ御由緒寺院ヲ尼門跡ニ改称ノ件ハ願意聴許相成候旨十二月十六日附総務局長ヨリ通牒有之候条此段及御通知候也

追テ本件ハ単ニ名称ヲ改メシモノニシテ別ニ待遇ヲ改メタルモノニハ無之為念申添候

(2) 大聖寺「御日記」にみえる対皇室関係 (§ 31)

尼門跡が皇室と特に密接な関係にあったことは、大聖寺の奥向の御日記からもうかがわれる。この「御日記」は、今から約300年前の万治3年以後毎日書きつづけられた奥向の日記で、大聖寺という特殊社会の内部をあきらかにするための貴重な資料の一つである。現存しているのは、いわゆる奥向の御日記である。表向には別に、「表の日記」がある。

奥向の大聖寺御日記の万治3年1月の条には、「禁中^{〔さき〕}ならせられ……」「仙洞^{〔さき〕}ならせられ……」といった記述が多く、これによって当時の、大聖寺・19世芳桂院宮に対して、御父・後水尾法皇をはじめ上皇の後光明院、当帝の後西天皇の御幸がひんばんに行われたことがわかる。次に示すのは、万治3年1月14日の仙洞様(後水尾法皇)御幸の記述である。(写真④参照)

仙洞^{〔さき〕}御幸ならせられ候御みやのよしにて銀子五枚まいるめうもん^{〔さき〕}同しん宮^{〔さき〕}しやうこういん^{〔さき〕}やうとく院^{〔さき〕}ならせられ候めうもん^{〔さき〕}よりこんぶ五わまいるしやうこういん^{〔さき〕}よりすぎはら十てう御ちやわん十まいるろくおん寺^{〔さき〕}も御まいりなされ候しん中なこん^{〔さき〕}よりさら廿すき折一つまいるよしかわ^{〔さき〕}大せん^{〔さき〕}八丸^{〔さき〕}御ともにて御まいりなされ候しん少将^{〔さき〕}も御まいりなされゑん光院^{〔さき〕}も御まいりなされ候あせちとのより御ちやわん廿あかるやうとく院^{〔さき〕}よりあふりこはうまいる

なお大聖寺の宮さん時代の御日記をみると、次のように、公卿方の御出入も多い。次に万治3年1月3日の御日記を示す。

おたぎ少将^{〔さき〕}れいぜい中將^{〔さき〕}なかぞの^{〔さき〕}ひぐち^{〔さき〕}かしん^{〔さき〕}御まいりなされ御さかつき出候ゆふふ卿御まいりやうかん三さは上ル 小すき二そく三ほん入あふきはこ一つくたされ候ひらなかも御まいり候 とうせんへいすこしあがる ふせんも御きさ御まいり候 くるみすこし上ル ゆらのみや^{〔さき〕}御礼ニならせられ候 御としたまゝ かや一はこ御ちの人よりこうりさたう一まけ物上ル

(3) 現ゴゼンの談からみた対皇室関係 (§ 32)

宮さん時代には、御参内になって、后宮^{こうぐう}さん(皇后陛下)に御対面という時でも、「御対々^{おたいたい}」の関係であったということである。(御生母は臣下としてお取扱いになる。)

公卿出身の住職に代った現在では、宮さん時代のようなお付けはなくなったが、新年には、

明しておきたいと思う。そのために、特に、大聖寺門跡では古来皇室との関係が極めて密接であった事情を述べて、若干の考察を試みたいと思う。

1. 大聖寺門跡と皇室 (§ 29)

(1) 大聖寺門跡と皇室 (§ 30)

明治維新以前までは、代々、内親王が住持された尼門跡は、特に皇室との関係が深い。このことは、既述の「大聖寺門跡について」 (§ 5-1) でふれたが、大聖寺の系譜を、「大聖寺門跡御系図」(明治初年記)によってみると、大聖寺では、維新までは、次のように、3世宮以下24世宮に至るまで、内親王が住持されている。

- 3世護溪院栄宮は後円融天皇の皇女、母儀は典侍局、これから「御寺御所」と称する。
4世妙覺心院昭嚴宮は後小松天皇の皇女。5世理慶宮は後花園天皇の皇女。
6世無礙心院慈勝宮は後土御門天皇の皇女。7世古鑑光院覚鎮宮は後柏原天皇の皇女、母儀は勅修寺准三后藤子。8世真浄院永寿宮は後奈良天皇の皇女、母儀は吉徳門院万里小路栄子。
9世宝昌院永高宮は正親町天皇の皇女、母儀は吉徳門院万里小路栄子の妹。10世祖芳宮は父帝など未詳。11世春齡宮は正親町天皇の皇女、母儀は目ノ典侍局。12世曠恩院永尊宮は正親町天皇の第3皇女。13世放光院華岳永召宮は正親町天皇の東宮陽光院太上皇誠仁親王の女宮、母儀は親上東門院勅修寺家の出。14世景室宮は父帝など未詳。15世春岳永俊宮は父帝など未詳。16世龍登院宮は後陽成天皇の第2皇女、母儀は中和門院近衛前関白前久公の女。
17世天祥院君山文高宮は後陽成天皇の皇女、母儀は前代宮に同じ。18世陽徳院説外永宗宮は後陽成天皇の皇女、母儀は平内侍局西洞院家の出。19世芳桂院久山元昌宮は後水尾天皇の皇女滋子、母儀は京極園家の出。20世本元院泰岳永享宮は後水尾天皇の皇女、母儀は新広儀門院園家の出。
21世勝光明院俊嚴永俊宮は霊元天皇の皇女、母儀は教法門院松ノ木家の出。22世清浄心院大寂永応宮は霊元天皇の皇女、母儀は藤ノ式部局今城家の出。23世勝妙楽院天嚴永皎宮は中御門院天皇の皇女、母儀は源内侍局久世家の出。24世普明浄院玉鑑永潤宮は光格天皇の皇女倫宮、母儀は藤ノ聰子、姉小路家の出。

このように、代々内親王が住持された大聖寺は、いわば皇室と御分家のような関係であり、皇室から物心両面の特別な愛護を受けた。12世宮の時に、父帝正親町天皇の勅命によって、大聖寺は永く尼寺第一位たるべきとの宸翰があり、その後、黒御所の触頭を勤めることになる。

さらに、後水尾天皇の時に、大聖寺・宝鏡寺・曇華院・光照院を直宮寺とし、上臈を置くことが定められた。

なおこのことについて、宝鏡寺には次のような後水尾帝の勅規がある。

自今(筆者主、宝鏡寺20世仙)宝鏡寺者以皇女永可寺法聯統也且繼孝建聖兩院之住尼今後聯々同居于本寺上臈役可勤務也若本寺無住之間者兩住尼之内年老者留守居役住持代寺件全可所置事(「尼五山景愛寺伝系西山宝鏡寺通代系譜事項」による)

また大聖寺21世宮の時(元禄9年7月)には、明正天皇の命によって、河原御殿の木石類を拝領し、24世宮の時(文政8年)には、光格天皇の勅旨によって、現存の「おしん殿」(寺では「殿宸御」と書いている)を下賜され、さらに、現在の御本堂は昭和18年に青山御所の御殿を移築したものである。

明治維新以後は王政復古とともに、内親王が尼門跡になられることはなくなり、明治4年、

〔注7〕 花のおかるた (§ 57)

〔追記〕 恐悦申入れのお文 (§ 58)

写 真 版 ① 大聖寺「御日記」万治3年1月14日 ②大聖寺「御日記」文政13年5月1日
③ 大聖寺所蔵「伊勢物語かるた」 ④ 同「源氏かるた」 ⑤ 同「源氏巻名かるた」
⑥ 同「恐悦申入れのお文」

は し が き (§ 27)

第Ⅰ部の序説において、筆者は尼門跡の簡単な構成とその言語生活の若干を記述し、さらにまた女房詞に関する諸文献とその解説を行い、本稿以後における意味論的諸研究の準備として、尼門跡において使用されている御所ことば（いわゆる女房詞）の実態の一部に触れてきた。

尼門跡の実態調査にもとづいて、言語的事実と、その言語生活の背景をなす尼門跡の非言語的（外的）事実との交渉関係は意味論の一般的課題への指針としても、多くの問題を含むものであり、われわれとしては、実態調査の具体的成果に照して、その方法の一端について意見を述べたいと思っている。特に語彙の方面は、音韻や語法に比べて、これらの関係の究明に役立ち得る要因を多く含んでいるが、これらについては稿を改めて説くことにする。

本稿では、かかる言語的事実と非言語的事実との関係を究明するために、非言語的事実である言語環境を採り上げ、筆者が大聖寺門跡から聴取したことや、大聖寺「御日記」などによって調査した大聖寺門跡における昔時と現在の人的構成・御殿の構造・年中行事・古習俗などの概略と、そこに生活する人々の対皇室関係、および尼門跡の教育やしつけの一般人と異なる特性などについて、主として現状を中心として叙述することにした。

その特性の叙述に際して、尼門跡はもと比丘尼御所ともいわれ、御所的性格と宗教的性格との二重性を具えていることを予め注意しておかなくてはならない。つまり宮さんの住持になった明治維新以前までは、御所的性格が強く、そこでは「奥」（奥向）と「表」（表向）とが区別され、「奥」は宮さんを中心とした尼僧からなり、「表」は対外関係をつかさどる寺侍からなっていた。明治維新以後は、次第に、宗教的性格が強まり、御所的性格は弱まってきたとはいえ、特に大聖寺門跡などには今なお古の姿がよく保存され、御所ことばによる生活が営まれている。

また本稿では、一般にはあまり知られていない「源氏かるた」「源氏すごろく」「翁かるた」など大聖寺に残存する文献の若干をも参考資料として紹介することにした。

なお、この研究は昭和33年度文部省科学研究費によるものであるが、われわれの研究に対して、特に援助と協力を与えられた大聖寺門跡・宝鏡寺門跡・曇華院門跡・中宮寺門跡・江馬務教授・三品彰英教授・池上禎造教授・阪倉篤義助教授・梅田俊一助教授・藤森信次郎氏・大塚実忠氏その他、関係各位に、心から感謝するものである。

第Ⅱ部 尼門跡の言語環境について

I 尼門跡の機構 (§ 28)

尼門跡の言語生活の構造を究明するために、筆者はまず言語生活の背景をなすその機構を解

尼門跡の言語環境について

——尼門跡の言語生活の調査研究（Ⅱ）——

井之口 有 一
堀 井 令以知
中 井 和 子

目 次

第Ⅱ部 尼門跡の言語環境 (§ 26)

は し が き (§ 27)

I 尼門跡の機構 (§ 28)

1. 大聖寺門跡と皇室 (§ 29)

- (1) 大聖寺門跡と皇室 (§ 30)
- (2) 大聖寺「御日記」にみえる対皇室関係 (§ 31)
- (3) 現ゴゼンの談による対皇室関係 (§ 32)

2. 大聖寺門跡の人的関係 (§ 33)

- (1) 大聖寺門跡の人的構成 (§ 34)
- (2) 大聖寺「御日記」からみた大聖寺の人の往来と贈答など (§ 35)

3. 大聖寺門跡の御殿の構造 (§ 36)

II 大聖寺門跡の年中行事 (§ 37)

- (1) 七草の祝 (§ 38)
- (2) 嘉 定 (§ 39)
- (3) 旧暦6月16日の「お月見」(お袖止め) (§ 40-1)
- (4) 旧暦8月15日の「お月見」 (§ 40-2)

〔付〕 大跡聖寺門の古習俗 (§ 41)

III 尼門跡の教育 (§ 42)

1. 大聖寺門跡の教養 (§ 43)

- (1) 大聖寺現門跡の受けられた教養 (§ 44)

- (2) 大聖寺門跡に残る「源氏かるた」などかるた類のいろいろ (§ 45)

2. 大聖寺門跡のしつけ (§ 46)

- (1) 「清」と「次」 (§ 47)
- (2) 公私の区別など (§ 48)

〔付〕 中宮寺門跡の「定」書 (§ 49)

む す び (§ 50)

〔注1〕 後水尾院当時の月見 (§ 51)

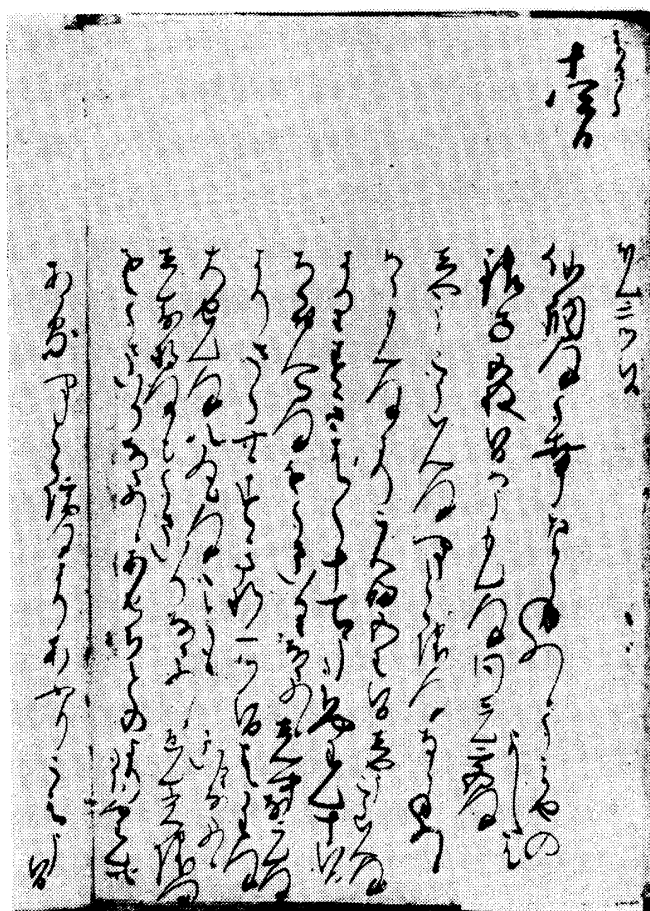
〔注3〕 源氏巻名かるた (§ 53)

〔注5〕 源氏すごろく (§ 55)

〔注2〕 源氏かるた (§ 52)

〔注4〕 翁かるた (§ 54)

〔注6〕 「色道大鑑」に記された歌かるた (§ 56)



(①大聖寺「御日記」万治3年1月14日, § 31参照)